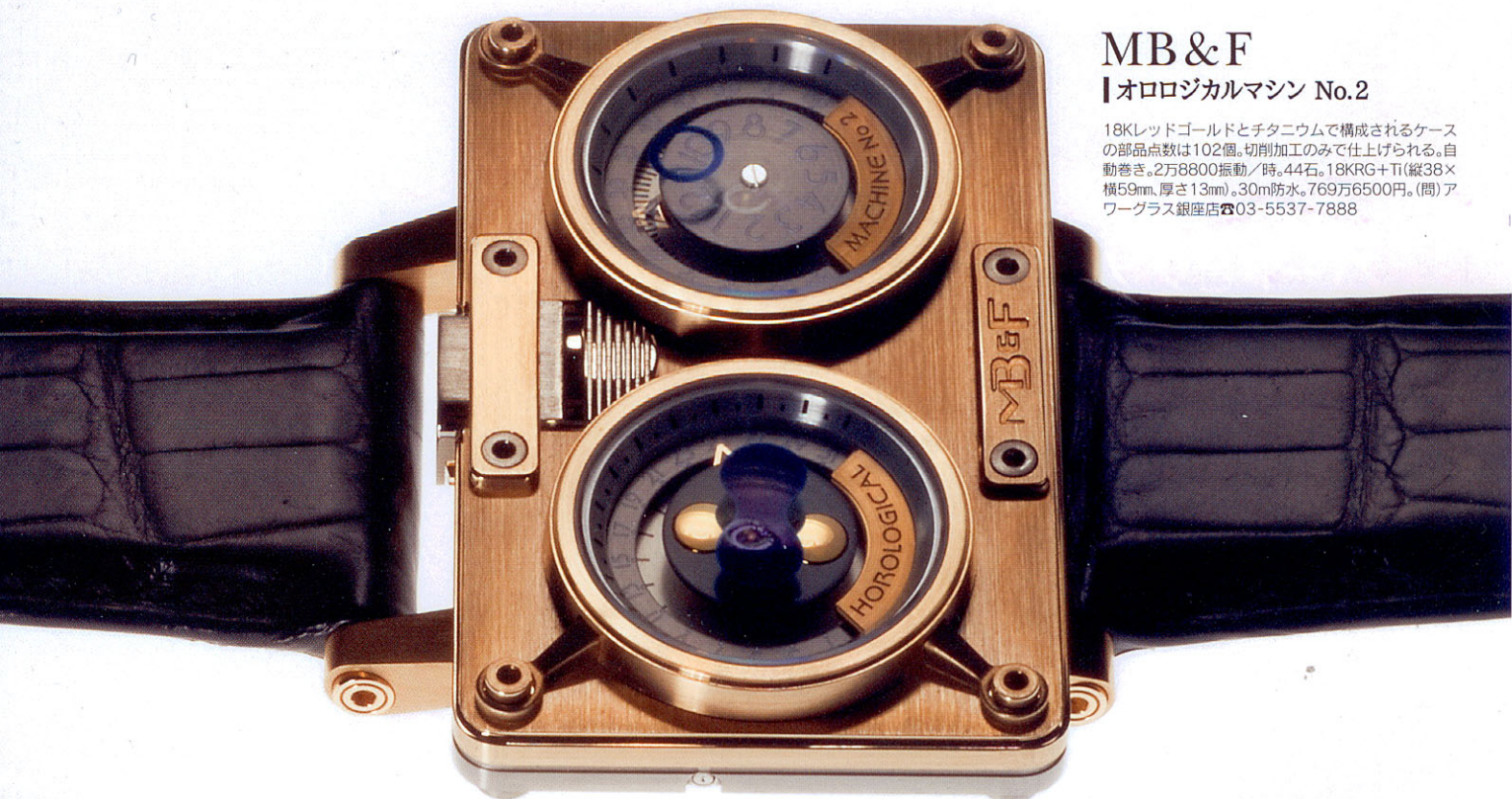


Chapter

1

ウォッチデザインの潮流

近年のウォッチデザインに共通する「上質感」と「立体感」。それを支えてきたのがデザインの「アイコン化」と「製作技術の進歩」だ。とりわけ、鍛造や切削技術の進化は、かつては実現不可能だったアイデアを形にすることを可能にした。平面的な造形から自由でより複雑な造形へ。ウォッチデザインの潮流は変化を遂げている。



MB&F

【オロジカルマシン No.2

18Kレッドゴールドとチタニウムで構成されるケースの部品点数は102個。切削加工のみで仕上げられる。自動巻き。2万8800振動/時。44石。18KRG+Ti(縦38×横59mm、厚さ13mm)。30m防水。769万6500円。(問)アワグラス銀座店 ☎03-5537-7888

アップサイドダウンで具現化された オロジカル・マシンの芸術表現

ついに3作目となったMB&Fの“時刻表示装置”。前2作に比べるとソフィステイクイトされた印象だが、機構をすべて文字盤側に配置し、すべてを「逆さま」にすることで、新しい芸術表現が具現化された。

Photographs by Masanori Yoshie
Text by Hiroyuki Suzuki(Chronos-Japan)

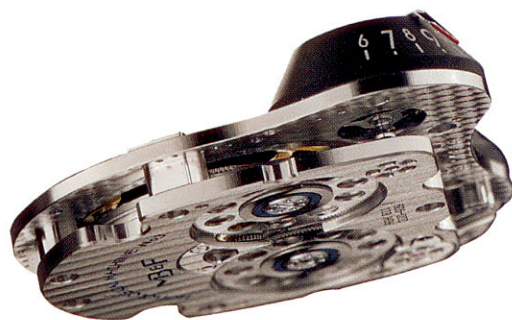
マキシミリアン・ブッサー氏がコンセプトを手掛けるオロジカル・マシン。年1作のペースで作品を増やし、ついにそのNo.3(以下HM3)がお披露目された。「アイデアしか持たない私が順調に発表できたのも、友人たちがいたからだ」とは氏の言だが、この友人たちとはオロジカル・マシン製作のために招集される、各分野の精鋭たちのことである。彼ら全員の名を公表するのもMB&Fを特徴付ける要素であり、そのため今回のように、作風に変化があった際にはまずスタッフロールに目が行く。

筆者が感じた「変化」とは意匠面である。前2作はかなりエッジが立った印象だったが、HM3では、そのあたりが非常にソフィステイクイトされている。デザインは変わらずにエリック・ジロー氏なのだが……。

「HM3は横から覗き込むように見なければ、まったく意味を成しません」と促されて腕に乗せてみると、サファイアクリスタル製のコーン側面に時分表示がある。この位置を正面とするなら、ケース側面に複雑な面構成を与えた理由も理解できる。HM3には平面形状のインバクトよりも、立体としての抑揚感こそ重要なのだ。加えて時計の大部分を占める平面部には、バトルアックス(戦斧状のローター)と、それを取り囲む巨大なデイトディスクを配置。その奥を覗き込めばテンプすら見える。

「HM3のムーブメントは逆さま。こうすれば、時計の美しい部品がすべて見えます」

このコンセプトとデザイン画を託され、逆さまの機構を具現化したのはアジェノーのジャン-マルク・ウィダーレキド氏である。



アップサイドダウン配置を実現するため、本来の文字盤側にはMPS社のセラミック・ボールベアリングを含む7枚の中間車がある。巨大なベアリングの配置は、70年代にスイスで製作された、ナグラ社のオープンリールレコーダーのイメージ。



円錐状のサファイアガラス内側を磨くのは至難。これを実現させたのはセバル社のスタッフ。ケースとの間に空間を残したラグは、G.F.シャトラン社で構成された。この空間表現は、サイドウィンダーではリュウズガードとして意匠に盛り込まれる。



HM3にはストラップの位置を変えたバリエーションもあり、こちらは「サイドウィンダー」と呼ばれる。ベースムーブメントの直径よりも大きなデイトディスクは、プッシャーを1mm押し込むごとに、約4mmほど動く。ディスクはルビーの4点留め。

MB & F オロジカル・マシン No.3 “スタークルーザー”

2ピースで構成されるサファイアコーンの側面に時分表示を配置。ドライブリングウォッチを思わせるが、平面部の大半はローターとデイトディスクで占められる。全体のフォルムはイギリスのSFドラマに登場する某2号、角を傷めないように三つ葉状に成形される特殊なネジにも、インスパイアされたキャラクターがあるとか。18KRG(縦47×横50mm、厚さ16mm)、自動巻き。36石。2万8800振動/時。価格未定。(問)アワーグラス銀座店 ☎03-5537-7888

